
ロックンロール・パブリック・サウンド

立花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロックンロール・パブリック・サウンド

【Nコード】

N93390

【作者名】

立花

【あらすじ】

この世はロックで出来ている。

綾瀬春樹25歳。

職業はロックンローラー。

恋人はどうやらドラゴン。

異世界にロックをかまします。

-----不定期更新です。

散りばめられた伏線、綿密に織り込まれたプロット、壮大に広がる世界観：そういったものは一切ありません。

見切り発車の親指任せです。

立花（著者）の息抜きなので軽い気持ちでございませう。

この世の中はロックで出来ている。

俺はそう感じるし、俺こそがロックだ。

俺の存在そのものがロック。

だからきつとこんなあり得ねえ事が起きるんだろ？

俺の頭上をドラゴンの腹が掠めていった。

ほら、最高にロックだ。

俺の名前は綾瀬春樹という。

どっかできたような名前だろ？

実際、名乗った相手からの失笑は見飽きてる。

あの女優が出てくる前までは俺はこの名前が好きだった。

綾瀬って苗字はカッコイイと思ってたし、春樹って名前もイケてる。

友達の、ハルとか、シュンっていう呼び方も気に入っていた。

そう、過去形だ。

考えても見る。

俺のような、25にもなつてロツクンロールで飯喰うためにバイトに明け暮れてるような奴が女優と一文字違いの名前なんだぜ？
名乗る度返される生暖かい反応。
ぜんっぜんロツクじゃねえ。

だから俺はあの女優が嫌いだ。

実際会うことがあつたら、アヤセハル歴は俺の方が上だと言いたい。

だが、俺の願いは叶えられそうもない。

しかし、これ以上なく叶えられたとも言える。

この世界にアヤセハルと付く名の人間は、俺しかいなさそうだ。

その日も俺は俺の全てを音に乗せて吐き出していた。
小さなハコ。

けど集まってくれる人たちはみんなアツい奴らばかりだ。
みんなの熱狂が、俺達を更に燃え上がらせる。

テレキャスターをかき鳴らし、腹から声を出して、できる限り最高

の演奏をする。

みんなにいいニュースがあったから、渾身のライブの後に発表した
い。

曲が終わり、MCをする。

「今日は、おまえ等がいいニュースがあるんだ…俺らのメジャーデ
ビューが決まりましたああアア！！新しい世界の扉が開けたけど、ぶ
ちかましてくるぜえ！」

更なる熱狂のうちにライブは終わり、俺はよく来るファンの子のう
ちの一人を持って帰り、朝を迎えた。

そのはずだった。

目が覚めたら、ドラゴンの腹の下だった。

卵よろしく暖められていた。

「何だこりゃアア！！」

初めはドッキリカメラか何かかと思った。

メジャーデビューしたばかりのアーティストを対象にしたマニアッ
クな番組か何かかと。

いや、分かってる。

俺たちはそこまで注目を受けてるわけじゃないし、昨今の不況はテ
レビ業界だって変わらない。

そんな誰得な番組は成り立たないだろうって事は。

でも、そう思いたかったんだ。

限りなく生きている様に見える、巨大なドラゴンは実は金のかかっ

た作り物だと。

目の前のものをあるがままに受け入れたら、俺は心が折れるかも知れない。

『新しい世界の扉が開けたけど』

俺のMCが脳内でこだました。

メジャーデビューの夢は潰えたらしい。

状況が理解できなくて、テンパる俺に、ドラゴンが迷惑そうな顔を向ける。

え？何その表情筋。爬虫類ってもっと無表情のはずだろ？家の柴犬ペスだってそんなに分かりやすい迷惑顔はしない。

半目で睨むところを見ると、瞼があるらしい。
なるほど、やはりドラゴンは蛇よりトカゲ寄りなのか、と変な納得をする。

蛇とトカゲの違いは手足じゃなくて瞼の有無だ。目の前の生き物は、竜というより、ドラゴンって感じた。ハリウッドのSFなんかに出
てきそうな奴。

感心して眺める俺に苛立ったのか、頭から喰われた。

いや、正確には、頭をかじられた。

「んなあつ!?!」

「うるさいわよ。あたしのキスが情熱的過ぎて興奮するのは分かるけど、ちよつと落ち着きなさい。まだ会ったばかりじゃないの」

ドラゴンは口から俺を吐き出して言った。

言った？

いや待て。え？喋んの？

「どうしたのよ。ああ、あたしに見とれてるのね。まあ、あなたの気持ちは分からなくはないわ。あたしのような美女なんて早々お目にかかれるものじゃないでしょうし。でも、嬉しいわ。なら、両思いつて事ね」

そう言つて歯をむき出して笑つたドラゴンに、うっかり俺はちびりそうになった。

ペスのアホな笑顔が懐かしい。

よし、落ち着け俺。クールにいこう。

脳内のペスに和んで、落ち着きを取り戻した俺は辺りを見回してみた。

どうやらえげつない高さの山の山頂付近の岩場にいるらしい。俺のいる岩盤の窪地には柔らかい草や、何かの生き物の毛皮が敷かれている。

風がすげえ冷たい。

このドラゴンに暖められていなかったら今頃浄土にいただろう。

「オーケー、とりあえず状況を整理させてくれ。まず、ここはどこだ？」

「あたしの巢よ」

「ほほう。で、君は誰だ？」

「ジェニファー」

「…っジェニファー…」

なぜ俺はここにいるんだ？」

「あたしが呼んだから。」

俺の質問に端的に答えるジェニファー（雌ドラゴン）。

シンプルなのはいいが端的過ぎて全く分からない。ていうかジェニファーで。ジェニファーて！

いや、やめよう。人の名前をとやかく言うのは。俺だってさんざん不快な思いをしてきたんだし。

よし、質問を変えてみよう。

「この世界は俺のいた世界とは違うらしいが、どんなところなんだ？人間はいるのか？」

俺の質問に、羽を揺らしながらつまらなさそうに答えるジェニファー。

「どんなところって…そうねえ。大陸が北と南にふたつ。島国が沢山。ここは北の大陸の最高峰ペウエレケ山。

あたしたちのふるさとね。

で、人間はこの大陸の南の方に少しと、南の大陸に沢山いるわ。」

ふーん。北の大陸。

大陸には名前はないのかな。

っつーか、本格的に異世界だよおい。

でも言葉が通じる！不思議！

東西南北まで同じっばい。

「なんで言葉が通じるの？」

「あたしがさつき愛情を込めてキスしたからよ。あたしのキスであなたはこつち側の生き物になったの。だから言葉も通じるのね。」

まあ、通じるっていつても、あなたがこつちの言葉を喋ってるんじゃないくて、あなたの脳が勝手に言葉を翻訳してるんだけど。

あなたの声は、相手の脳に働きかけて言葉を翻訳させるの」

キスってさつきのか。

頭かじることがジェニファーにとってはキスになるらしい。

情熱的過ぎるだろ。

「キスでこつちの世界の生き物になったって？」

「あたしが喚んだ段階では、あなたはまだあつちの世界の住人だったみたいね。あなたが喋ってること全然分かんなかったもの。で、あたしのキスであなたはこつちの世界に固定されて、受け入れられた。だから言葉も通じるようになったのよ」

あああ分かんねえ！！

俺の理解力がないのか、ジェニファーが説明下手なのか。

けど、とりあえず一個引つかかるところがあった。

「ジェニファーが喚んだ？」

「そうよ。さつきあなたの歌声が聞こえてきたの。あんなに情熱的に愛を歌われるなんて…あたし初めてで。あなたの想いに応えなくつちやつて。で、あなたを喚んだの」

「だからいまいち分かんねえつての。さつき？俺の歌が聞こえた？」

「ええ。言葉の意味は分からなかったけど、あなたが愛を歌っているのは分かったわ。…すぐに分かったの。あれはあたしに向けたものだった。だって、聞こえたのはあただけなんだもの。だから、あなたの想い人はここにいるのよって、あなただけを喚んだの。嬉しいわ。あなたもあたしの姿を気に入ってくれたみたいで。さつき見とれていたでしょう？安心して。あたしもあなたが気に入ったわ。…

今日から恋人なんて、照れるわね」

後半部分を意図的に聞き流しながら俺は理解した。

ジエニフアーが聞いたというのはライブの事だろう。

なぜか俺の歌声がこの世界に、ジエニフアーの耳に聞こえてきて…俺の歌に惹かれたジエニフアーが俺を呼んだ。

「ああマジかよ！ちょ、ジエニフアー、俺をあっちに帰すことってできるだろ？できるはずだよな？」

できるといつてくれ今すぐに帰すと！

「できないわよ。言ったでしょ、あなたはこつちの世界の生き物になったって。あたしがキスする前ならまだしも、もう無理よ」

目の前が真っ暗だ。

俺の…俺達のメジャーデビューが…

これからだったのに。

全部全部これからだったのに！

「ああああ畜生オ！！」

「どうしたのよ、忘れ物があったの？ほら、あなたの大事なものは一緒に運んだのよ？」

ジエニフアーが体に対して小さな手で指を指す。俺のギターケースがあった。

テレキャスター！。

俺の愛器。

「ここにああ電気もアンプもねえじゃねえかよお！ベースもドラムもいねえんだよおっ！」

たまらなくなつてギターを抱きしめて泣いた。

丸まって泣く俺をジエニフアーがまた腹の下で暖めてくれた。

俺は小さい頃、親父の後を継ぐんだと思っていた。

親父はハナからそのつもりで、まだ5歳かそこらの小さい俺に自分のまねをさせていた。

俺が上手くできると、親父は俺の頭をぐりぐり撫でてにかつと笑って見せた。

『いい声だ。上手にできたな。今度は気持ちを込めてみる。言葉の意味は分からねえだろうが、心配しなくてもいつかは分かる。今は、おまえの気持ちを乗せるんだ。俺たちはこれで飯が喰えてるんだ。絶対におざなりにするもんじゃねえ』

俺は素直に頷いて、練習に励んだ。

あの頃の親父は俺にとってヒーローだった。

だが、俺が中学に入ってからのことだ。

俺はあるバンドを知った。彼らの音楽は俺の脳を揺さぶり、衝撃を与えた。

そこから総てが変わった。

がむしゃらにギターを練習し、唄った。

彼らのようになりたくて、彼らの様な音楽を作りたくてバンドを組んだ俺を、親父は黙って見ていた。

そのうち俺が親父の後は継がない、俺はプロになる、という親父が反対し出した。

それに俺は猛反発して家を飛び出し、メンバーの家に転がり込んで…… やつとメジャーデビューが決まった。

ここからだ。親父もきつと納得させられる。

ごめん父ちゃん。

一人息子の俺が後を継がなかったら、困るのは分かり切ってるのにな。

「ごめん、寺継げなくて」
「てら？」

ジェニファーが不思議そうにあげた声で覚醒した。

何だ今の夢は。走馬燈のようだ……と思ったところで納得。妙に息が苦しいと思ったら、ジェニファーが俺に体重をかけ過ぎている。血圧があがって脳内出血するのが先か、圧死が先かって感じ。さっきのはリアルな走馬燈だったようだ。

「ジェニファー、退いてくれ」
腹を叩いてやると、素直にその巨体をずらしてくれた。
ふう。やっと呼吸が楽になる。

起きあがって、体をのばす。
今日も風は冷たく、俺の頭は一気に目覚めていく。
親父どうしてるかな。

俺がいなくなったという知らせはいつ入るのだろう。

感傷的になったが、本格的に体が冷えてきたので、ジェニファーの背中に登り、羽の付け根に潜り込む。

ジェニファーは恒温動物のようで、爬虫類なフォームとは裏腹に暖かい。

俺が背中にいるのが、ジェニファーも気に入っているようで喜んで背中を明け渡してくれる。

しかしなんて広い背中だろう。
頼りがいがありすぎる。

俺がこっちの世界にきて、一週間経つ。

その間、俺の面倒は全てジェニファーが見てくれている。

ジェニファー達ドラゴンは、オスは完全にヒモらしい。メスは甲斐しくオスに尽くし、オスはいざという時にメスを守る。

ジェニファーは俺を完全に自分のオスだと捉えているので、嬉々として俺に尽くしてくれる。

俺としては複雑だ。

尽くすジェニファーを可愛いとは思うが……俺が三人は乗れそうな広い背中を持つドラゴンだ。

そう言う対象に思える方がどうかしている。

そんな事をつらつらと考えながら羽の下でぬくぬくしていると、ジェニファーが声をかけてきた。

「ねえ、あたしあなたの歌が聞きたいんだけど……歌ってくれない？」

もじもじしながら言うな。可愛く思えるだろうが。

黙っている俺にどう思ったのか、ジェニファーが急いで言葉を続ける。

「だって、あたしあなたの歌が好きなの。あなたの歌で好きになったのに、聞けたのはあなたを呼んだあの一度きりだわ。……お願い」

俺の歌が好き。

そういう言葉はどんなシチュエーションでだってうれしいものだ。

「いいけど……ここでは無理。風が冷たすぎるんだよ。喉が凍り付いちまう」

「わかったわ。もっと暖かいところならいいのね」

言っただけジェニファーは俺の体をその手でつかむ。そっと覆って冷た

い風が入らないように手で庇いながら、彼女は空を飛んだ。

不快な浮遊感。

目元もジェニファアの手に覆われているので何も見えない。

ただ、凄いスピードで進んでいることは分かる。

内臓が引き絞られ、内容物がせり上がってくる。

ここで戻すわけにはいかない。

ジェニファアの手の中だ。可哀想だし、驚いて手を開かれたら落ちて死ぬ。

軟弱な内蔵と必死に戦い抜いて、やっとジェニファアの足が地面を踏んだ。

すぐに下ろしてもらい、周りをろくに確認するまもなく地面に手を突いて一気にリバーズ。

生理的な涙をまばたきで払い落とすと、濃い緑が汚物の周りを縁取っていた。

ゆっくりと当たりを見回すと、高い木々に深い草。

森の中にいるようだった。

濃密な緑の濃い空気。

ずっと高い山上にいたから、この湿度の高そうな空気が心地いい。

「ダーリン、ごめんなさいね。二人一緒の初飛行で浮かれすぎたみたい。大丈夫？」

いいながら、見たこともない大きな皿状の葉っぱに水をためて持ってきてくれる。

ありがたく貰って、口を濯いだ。

落ち着くまで座って体を休めた俺は、しばらくして立ち上がり、あたりを見回しながら歩きだした。

戻したおかげで腹は空いたが、それよりも今はこの森が気になる。

濃密な緑の空気。

それを吸いながら散策を始めると後ろからガサガサと音が聞こえてきた。

振り返ると、ジェニファーがひこひこ体を揺らして後をついてくる。

空を飛ぶ姿は美しく格好いいジェニファーだが、歩くのは苦手らしい。

俺は久しぶりの草木の感触を楽しみ、花の香りを嗅いだ。

空を仰ぎ見れば高い木々、背後には今までいたペウエレケ山がそそり立つ。

下から見ると本当にえげつない高さで、またあそこに帰るのかと思うとげんなりする。

ジェニファーはしっぽをふりふり俺のそばに来て、期待に満ちた目で見つめてくる。

「……ああ。歌か」

ジェニファーの熱い視線でここに来た目的を思いだした俺は、ジェニファーの羽根にかけておいたテレキャスターを手取る。

電気もアンプもないが、どうしても手放すことができない。自分の未練がましさに笑っていると、ジェニファーが首を傾げた。

「それは何？」

「ギター……楽器だよ。電気がなけりゃあ意味ねえんだけどな」
ギターケースから取り出し、構える。

俺の真紅の愛器。

こつちに来てから初めて触る。ありがたいことに弦は切れていないようだ。

鳴らしてみるとガチャガチャという小さい音。

アンプが無いから当たり前だが、エレキ特有のあの音が恋しい。

「それってそんな音なの？あたしが聴いたときはもっと響くような音だったと思っただわよ？」

「だから電気がなきゃ意味ないんだって。あとアンプ」

「ふうん？」

ジエニファーが不思議そうに二本のヒゲを動かす。鼻面にあるそれは、自分の意志で自由自在に動かせるらしい。

気にせずに弦を爪弾くと、聞き慣れたエレキ特有のあの音が響き渡った。

「……は？え？」

俺の聞き間違いか？

恋しさのあまりの幻聴だろうか？

この世界では諦めていた出るはずのない音が聞こえた気がした。

どきどきしながら、もう一度ギターをならす。

ギユワアアアン

俺の耳朵を打つエレキの泣き声。

聞き間違いじゃない！

俺は殆ど泣きそうになってジエニファーを見る。

「なんだよそり」

噛んだ。

思わず笑って、泣いた。

俺のギターの電氣的な音は、ジエニファアの半開きの口から響いていた。

ジエニファアのヒゲが俺のエレキのプラグに刺さり、口から漏れ聞こえるギターサウンド。

俺の顔を見て、表情筋の鍛えられたらドラゴンが輝くような笑顔を浮かべた。

若干間抜けなその姿に、笑うより先に感動してしまった。

「ジエニファアすげえ。最高だ」

どうやったらそんなことができるのか分からないが、今はどうでもいい。

もう一度、ギターを鳴らすことができる。

俺は歓喜のままに、ギターをかき鳴らす。

ライブハウスで一番人気の渾身作のラブソング。

ジエニファアが聞いたという愛の歌。

俺のギターが泣き出して、ベースが入り、ドラムがリズムを刻む。

一瞬、あるはずのないマイクが見え、マイク越しにいつも来てくれるファンの顔が浮かんだ。

けれど、実際俺がいるのはどこだか分かんねえ森の中で聞こえるのはドラゴンの口を経由して響く俺のギターだけ。

歌い出しから、感極まりそうだ。

歌詞の意味など関係ない。

元の世界への郷愁と、帰れない諦念と、寂しさ。そしてギターサウンドを取り戻した安堵。

いろんな感情がない交ぜになって、爆発する。

俺はもう泣きながら歌った。

無我夢中で叫ぶように歌って、ギターの余韻が空気を震わせる。

口を閉じたジェニファーも、静かに泣いていた。

「何でお前が泣くんだよ」

ドラゴンにも涙腺がある、という新しい発見に少し笑った。

「だって……言葉の意味は分からないけれどあなたの感情がぶつかってきたんだもの。ごめんさい。あたしがこっちに詠んだからあなたは寂しいのね。前の世界が恋しいのね」

今初めて伝わった、というように泣くジェニファーに、俺は静かにうなだれた。

今更かよ。

怒りが沸いてきそうなものだが、それよりも歌に引きずられた感情が複雑すぎてぐちゃぐちゃだ。

歌えば発散できるのに、嗚咽が混じってもう声にならない。

俺は草の深い地面に仰向けになってただただ泣いた。

泣き過ぎて頭が痛い。

目もみっともなく腫れているだろう。

俺は何歳だ。情けねえ。

ジェニファーに帰れないと言われてから、感情には折り合いをつけてきた筈だったのに。

ため息をついて、立ち上がる。

俺を見守っていたジエニファーがゆっくりと近づいてくる。

「どこに行くの？」

「川。池でもいい。飲めそうな水のあるところ」

答える声が掠れてやがる。

あれだけ泣いたら仕方がないが、喉を痛めたくはない。

結局、俺はどこへ行っても歌のことを考える。

けれどジエニファーがいる限り、どこへ行っても歌が歌える、と思つたら少し気分がよくなった。

「ならこっちよ」

ジエニファーが先導するあとをついて歩く。

太ましい尻尾が歩く度に左右に揺れる。

この尻尾だけで俺の体重を支えられるんじゃないだろうか。

俺の視線を感じてか、ジエニファーが後ろを振り返り

「メッ」

と照れたように言った。

軽く腹が立ったが、ジエニファーの目元もまだ 涙で濡れているのに気付いて何もいわなかった。

#3 (後書き)

一旦投稿した#3ですが、加筆、修正し投稿し直しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9339o/>

ロックンロール・パブリック・サウンド

2011年4月14日03時05分発行